

masquerade part nine

number 4

原定100部の内の11/100

edited by dr masato mugitani

6本目の指

麦谷真里

(はじめに) 英語では、"6th Finger Tip"と呼ばれている場合もありますし、"False Finger"と呼ばれている場合もあります。通常のフィンガー・チップと大きく異なるのは、根元に切り込みが入っていることで、これは指の間に挟むことを想定しているからです(写真99)。



写真99

チャールズ・モリットという人によって創案され、1896年にチャールズ・パートラムとオーガスト・ローテバークとによって世の中に紹介された、ということになっています。また、モーリス・ガーランドが1903年までそれを使っていた、とホフマン教授の"Later Magic"に記述があります。

日本の奇術家で、その存在を知らない人はいないと思われませんが、所有している人でも、ほとんどの場合は、シルクを出すことくらいにしか使っていないのではないのでしょうか。空の手からシルクを出すときには必須の道具で、実は、オキトがその名手でした。オキトはレクチャーを行なうとき、その大半をこの「6本目の指」の使い方に関心したと言います。そして、レクチャーの後ではいつも

このギミックが完売してしまったとされています。オキトの時代においても、奇術家の間であまり使われていなかったらしく、レクチャーの参加者はいずれもオキトが空の両手からシルクを出す演技を見て、6thフィンガー・チップの有用性に驚き、購入したものと思われます。オキトがレクチャーを行っていたのは、おそらく1940年代～1950年代だと推測されますから、すでに、この時代、6thフィンガー・チップは奇術家の間でもあまり使われなくなっていたということです。オキトは1963年に88歳で永眠しますので、その後、6thフィンガー・チップのレクチャーをする奇術師はいなくなり、再び現代まであまり使われなくなりました。では、販売されていないかという、そうでもなく、いまでも欧米の奇術用具のディーラーでは商品として扱っています。ちなみに、私が写真99に用いた6thフィンガー・チップの中には、かつて株トリックスがシルクを付けて商品として販売していたものもあります。(株トリックスの解説書は、まさに空の手からシルクが出て来る現象のもので、その他の使い方としては金魚とタバコがアイテムとして挙げてあるだけです。このシルクの出現の使い方が長く日本での最大公約数だったことがわかります。

さきほど、オキトの例を挙げましたが、実は、文献を渉猟すると、なんとバーノンも含めて、この6thフィンガー・チップを使った手品を演じているマジシャンはけっこういるのです。そこで今回は、題して「目から鱗の6thフィンガー・チップ」を取り上げます。

解説するのは、次の9つの使い方です。

1. オキトの「空の手からのハンカチーフ・プロダクション」
2. スリック・シルク・プロダクション(これが日本や欧米での一般的な使い方です)
3. 20世紀シルク
4. 大きなシルクのプロダクション
5. デ・コルタのシルクと皿
6. 塩の消失と出現(Salt Pour)
7. シルバー・フィンガー
8. ライジング・カード
9. 悪魔の指

このほかにも、「11本の指」や、指ギロチンを使うなどの、いわゆる「ジョークもの」がありますが、今回は、割愛しました。

順に述べて行きます。

1. オキトのベアハンド・プロダクション

前述のように、オキトはかなりの情熱をこのシルク・プロダクションに注いでいます。

[準備]

6thフィンガー・チップの中に鉛筆などの細い棒を使ってシルクを中央から花のように入れます(写真100)。入れたら、右手の中指と薬指との間に保持しておきます。両手は、指先が観客のほうを向くようにして、じっとしていないで、手首を回転させながら、両手が空であることを示します。オキトは、決して掌側を観客に見せてはいけなく、必ず、指先を観客のほうに向けるようにしなけ

④シルクを空中に投げ上げ、それを右手もしくは左手で掴んで、何気なく両手が空であることを示します。



写真102



写真103

【コメント】

オキトのレクチャーに参加すると、まず、このシルクの出現をオキト自身がやってみせるので、見ている人は、本当に空の手からシルクが出現したように見えて、びっくりします。次いで解説を聞いて、タネが6thフィンガー・チップなので二度びっくりします。そして、オキトは、このシルクの出現を懇切丁寧に解説するのです。よくアメリカの手品の本に書いてある表現で、「この手品のやり方を覚えただけで、この本を買った価値があります」というのがありますが、このオキトの「ベアハンド・シルク・プロダクション」はまさにそれです。手品のタネは読んだだけではわからないもので、誰かに演ってみせて初めて価値がわかります。

2. スリック・シルク・プロダクション

これは、1941年に雑誌 Sphinx で Carl Lyle によって広告された“Slirk Silk”という商品です。広告の怪しい文句は次のようなものです。

「マジシャンは指を大きく広げて、両手が空であることを見せたあと、一瞬のうちに、45cm角のシルクが出現します。両手を身体に近づけることはありませんし、袖を揺んだりすることもありません。45cm角のシルクの代わりに、30cm角のシルクを2枚出すことも可能です。ギミックは、かつての『6本目の指』を合理的な形に登えたもので、どこでも使うことができます。価格は1ドルです。」

広告で、すでに、6thフィンガー・チップだと言及されていますから、シルクの大きさも述べられているところを見ると、かつのものより材質が良くなり、中の収納力が増えたということだと思います。Slick というのは、「なめらか」とか「きれい」という意味ですから、商品化するときに、Silk と対比する文字的な面白さを考えて、あえて Slik というスペルにしたのでしょう。ちなみに、1941年というのは、12月8日に日本が真珠湾を攻撃した年です。

[準備]

6thフィンガー・チップの中に、鉛筆などの細い棒を使って45cm角シルクを押しこんで入れます。Carl Lyle は、フィンガー・チップに入れた最後の端に小さく結び目を作っておくことを勧めています。そうすると中に入れたシルクを取り出し易くなります。

[やり方]

- ①シルクを入れたフィンガー・チップを右手の人差指と中指の間に保持します。
- ②両手を軽く空であることを見せたら、甲が観客側を向くようにしてマジシャンの身体の前で合わせます。左手が観客側、右手が手前側です(写真104:シルクが見えるように撮ってあります)。



写真104

- ③この状態で、左手の中指の先端と親指の付け根とでフィンガー・チップを挟みます(写真105)。
- ④この状態から、ゆっくりと両手を左右に離して行きます。そして、フィンガー・チップの空いている口側が右手の指先の部分まで来たら、右手の人差指と中指とでシルクの結び目をしっかり挟みます。そのまま、さらに両手を左右に離して行くと、シルクがどんどん出てきて、両手の間で大きくなります(写真106)。
- ⑤シルクが完全にフィンガー・チップから出たら、そのまま左手に巻きつけて、フィンガー・チップと

ともに抜きとって、上着の胸ポケットに入れます。



写真105



写真106

[コメント]

私の所有している劇団リックスの商品は、「ザ・シックス・フィンガー」というそのものズバリの商品名で、フィンガー・チップと45cm角シルクが付いて来ます。やり方は概ね同じですが、右手のフィンガー・チップは、そのまま親指と中指とで握んで取っています。また、シルクの端の結び目については言及がありません。前述のように、シルク以外には金魚とタバコが例として挙げてありますが、どのようにして出現させるのかの具体的な説明はありません。したがって、やはりシルクの出現が典型だったと思われます。

3. 20世紀シルク

20世紀シルクでは、レインボー・シルク(間のシルクのこと)を消す際にはサム・チップなどを使いますが、これはそうではなくて、出現する方のレインボー・シルクに6thフィンガー・チップを使うという意味です。それなら、何もフィンガー・チップなど必要ない、と思われる方もいらっしゃるかもしれません。しかし、6thフィンガー・チップを使えば、レインボー・シルクを畳みこんでセットする必要

がないですし、セットしたシルクを慎重に扱う必要もありません。

[必要なもの](写真107)

- ①45cm角シルク 2枚
- ②小さめのレインボー・シルク 2枚
- ③シルク・パニッシング・ウオンド 1本
- ④30cm角の新聞紙
- ⑤6thフィンガー・チップ 1個

20世紀シルクは通常2枚の大きなシルクと2枚のレインボー・シルクがセットになって商品として売られていますので、それをそのまま使うことができます。私は、藤テンヨーのものを使っています(写真107)。また、シルク・パニッシング・ウオンドは、これも欧米の奇術用具店では単独商品として売っていますが、日本ではあまり見かけないので、私はこれも藤テンヨーの「ハンカチーフと水の雲隠れ」に付いてくる銀色のウオンドを使っています(写真107)。そういう用具がなければ、レインボー・シルクを消すための別の手段が必要になりますが、すでにフィンガー・チップを使っている以上、さらにサム・チップを使うのも煩雑なので、その場合は、ハンカチーフ・ブルなどを使うのが良いと思います。



写真107

[準備]

大きなシルクの1枚とレインボー・シルクを結んで、レインボー・シルクを中央から6thフィンガー・チップの中に入れて行きます。そして、レインボー・シルクを完全にフィンガー・チップの中に入れて、結んでないほうの対角の端と大きなシルクの結んであるほうの端が重なるようにしてフィンガー・チップの入口にセットします(写真108)。

この場合、フィンガー・チップを使う大きな利点は2つあります。ひとつは、後で行なうように、このセットした大きなシルクをほぼ完全に観客に見せることができることです。通常は、20世紀シルクのセットしてあるほうの大きなシルクは、中にレインボー・シルクが折り畳んであったり、あるいは、大きなシルクの中に袋状に作られたセット場所に挿入されていて、テーブルからそっと持ち上げて、軽く観客に見せることしかできませんが、フィンガー・チップを使った場合は、このフィンガー・チップ

部分さえ指の間に挟んでおけば、セットされた大きなシルクはかなり自由に振ったり、広げたりすることができることです。もうひとつは、フィンガー・チップの容量からかなり大きなレインボー・シルクでも使えることです。



写真108

テーブルの上には、このセットした大きなシルクのほか、もう一枚の大きなシルクともう一枚のレインボー・シルク、それにシルク・パニッシング・ウォンドと新聞紙とを置いておきます。新聞紙はフラッシュ・ペーパーのほうが、完全にレインボー・シルクが消えたと思わせることができいいのですが、火を点けたりするひと手間が多いのと、20cm×30cm角の大きめのフラッシュ・ペーパーをすぐに入手できるとも限らないので、ここは新聞紙にしました。

[やり方]

- ①テーブルから2枚の大きなシルクを取り上げます。左手は、フィンガー・チップをセットしてあるほうのシルクを取り上げながら、フィンガー・チップが左手の人差指と中指の間に挟むように位置させます。シルクは、そのまま左手に懸せておきます。一方、右手はもう一枚の大きなシルクを取り上げます。
- ②両手のシルクをそれぞれ振りながら仕掛けのないことを示します。左手は動かしている限り、フィンガー・チップの存在に気付かれることはまずありません。両手を近づけて、右手の大きなシルクの端と、フィンガー・チップから出ているレインボー・シルクの端とを結びます。結んだら、フィンガー・チップをシルクの上から摘まんで、上着の胸ポケットに入れます。大きなシルクは、そのまま2枚とも上着の胸ポケットから外に垂らして出しておきます。
- ③新聞紙でコーンを作ります。まず、テーブルからシルク・パニッシング・ウォンドを取り上げて、コーンが空であることを示します。通常は、コーンの形状が崩れないように固定したら、右手でウォンドを持ち、左手でコーンを送さまにして、シルク・パニッシング・ウォンドに結せ、そのままウォンドでコーンをクルクル回して見せます(写真109)。こうすることによって、コーンが空であることを示したら、再びコーンを左手に円錐の頂点が下になるように戻し、右手でウォンドを抜き出します。このとき、ウォンドの外側の筒をコーンの中にひそかに置いて来ます(写真110)。

- ④一旦、右手のウォンドをテーブルに置き、テーブル上のレインボー・シルクを取り上げて、左手のコーンの上に掛けます。空いた右手で再びウォンドを持ち上げて、レインボー・シルクをコーンの中に押しこみます。シルクは、そのままウォンドの筒の中に押しこまれます。



写真109



写真110

- ⑤ウォンドを抜いて、テーブルの上に置きます。すでに新聞紙のコーンの中は空です。このままコーンをビリビリに破いてレインボー・シルクが消えたことを見せます。単にコーンの中を見せるだけではコーンが二重になっているのではないかと疑う観客がいますから、小さく破いて見せることが肝要です。フラッシュ・ペーパーなら、一瞬にして消えますから、もちろん破く必要はありません。
- ⑥左手で、上着の胸ポケットを押さえます。これはフィンガー・チップが飛び出さないように押さえるのです。右手で、垂れ下がっている大きなシルクの一方を引っ張って空中になびかせると、2枚のシルクの間に見えるレインボー・シルクが現れます。

[コメント]

レインボー・シルクを消すのに、シルク・バニシング・ウォンドを使うのは私のアイデアではありません。

ません。上のアイデアは、Robert Schroette という人によって、1941年の GENII に発表されました。もともとは、赤と青のシルクの間にはアメリカの国旗が現れる現象でした。このセットは現在入手しにくいので、通常のレインボー・シルクにしました。Robert Schroette 自身は、秘密のポケットの付いた新聞紙を好むそうです。紙テンヨーの商品は、サムチップを使って消していて、そのために小さなサム・チップでも消せるように、レインボー・シルクは半分に切つてある三角形のものが付いています。

4. 大きなシルクのプロダクション

これは、6thフィンガー・チップで出現した小さなシルクからさらに大きなシルクの出現へと合計3段階で徐々に大きなシルクを出現させるものです。

[必要なもの](写真111)

- ①30cm角のシルク 1枚
- ②90cm角のシルク 1枚
- ③伸縮棒に付けられた大きなシルク・フラッグ 1本
- ④6thフィンガーチップ 1個



写真111

[準備]

- ①30cm角シルクを6thフィンガー・チップの中に入れておきます。
- ②90cm角シルクは、丸く折り畳んで小さくして、最後のを換んで開いて来ないようにしておきます。これをズボンの左ポケットに入れておきます。
- ③伸縮棒に付いたシルク・フラッグは、棒に固く巻いて、これも開いて来ないように、端を折り畳んで挟み、ズボンの左側のベルトに棒の部分を入れておきます。シルク・フラッグは上着で隠せば見えない位置です(写真112)。

以上の準備で、シルクの畳み方やセットの仕方は、すでにたくさんの成書がありますので、それを参照してください。また、90cm角シルクを演技の途中でズボンの左ポケットからひそかに取るの

ですが、もちろん、シルクをスティールするためのクリップなどを上着の裏に付けてそこからひそかにスティールしてもかまいません。



写真112

【やり方】

- ①6thフィンガー・チップは、右手の人差指と中指との間にセットしておきます。
- ②両手を軽く空であることを見せたあと、右手で何かを空中で掴む動作を行ない、右手を握りますが、この動作の中で、フィンガー・チップを中指と薬指と小指で口を上にして握ります。そして自由になっている親指と人差指とで中のシルクを少しずつ出現させます(写真113)。



写真113

- ③これを右手だけで演ると、自然に身体は左側を向きますから、この隙で左手をズボンのポケットに入れて丸めた90cm角のシルクをひそかに握って出して来ます。右手のシルクが完全に出たら両手を一瞬合わせ、右手のシルクだけを左手に渡しながら、左手から90cm角のシルクを出します。このとき、身体がやや右側を向きますから、右手に残っているフィンガー・チップをズボンの右ポケットにしまします。
- ④左手に2枚のシルクを下げて持っています。右手をシルクの中に入れる感じで、実際は上着の内側に手を入れて伸縮棒の大きなシルク・フラッグを掴んで来ます。右手で棒を延ばしながら、

大きなシルク・フラッグを出して左右に振ります。これがクライマックスとなります。

5. デ・コルタのシルクと皿

Boutier De Kolta は、こんな小品も好きで演じていたようです。

[必要なもの]

- ①30cm角のシルク 2枚
- ②中程度の大きさの皿 1枚
- ③細めのマジックウォンド 1本 (写真は TCC のウォンドです)
- ④6thフィンガー・チップ 1個

[準備]

シルクの1枚を折り畳んで、マジックウォンドの端に巻いておきます。あとで振き取れるように巻いておきます(写真114)。そして、この上に、シルクが見えないように小皿を被せておきます。



写真114

フィンガー・チップはズボンの左ポケットに入れ、もう一枚のシルクは、上着の胸ポケットに入れておきます。

[やり方]

- ①右手で皿を取り上げ、同時に皿の陰で左手で巻かれたシルクの部分を隠し持ちながらウォンドを取り上げます。右手の皿を上向きにテーブル上に置いて、左手のウォンドを右手に移します。巻かれたシルクは隠したままです。右手のウォンドで、上着の胸ポケット軽く叩き、次いで、左手で皿を持ち上げて、両面を軽くウォンドで叩いて見せます。
- ②皿を再び上に向けてテーブル上に置きます。右手のウォンドを左脇に挟みながら、シルクをひそかに抜きとって、指先を皿の上側、親指を皿の下側にして、この手で皿を廻んでうつ伏せにひっくり返しますが、このとき、シルクを皿の下にロードします。ベンソン・ボウルの要領です。
- ③ウォンドを左脇に挟んだまま、身体をやや左側に向けて、右手で上着の胸ポケットのシルクを取

ります。このとき、左手でズボンの左ポケットにあるフィンガー・チップをひそかに取り出して来ます。

④両手を身体の前で合わせます。フィンガー・チップは、右手の薬指か小指に挿せます。シルクを空中で左右に投げながら、両手が空であることを見せます。

⑤再び両手を合わせ、フィンガー・チップを左手に取って握ります。シルクを左手に掛け、右手で左脇下からウォンドを取って、これで、シルクを左手に押しこみます。実際はフィンガー・チップの中に入れて行きます。

⑥ウォンドを使って、あと一息でシルクが押し込まれようとしたとき、ウォンドの下端にシルクとフィンガー・チップを付けたまま、ウォンドを手前に向けてフィンガー・チップと中のシルクとを右手に取ってしまいます(写真115)。これは、デヴィッド・ウィリアムソンの方法です。



写真115

⑦左手を開けるとシルクは消えています。右手のウォンドを左の脇の下に挟みますが、フィンガー・チップと中のシルクは右手に残しておきます。空いた左手でテーブルの上の皿の手前の縁上げて皿の下を覗き込みます。このとき、マジシャンの身体がやや右を向きますから、右手のフィンガー・チップをズボンの右ポケットに入れて処理してしまいます。左手で皿を上に向けて開けながら、右手でウォンドを左脇の下から抜いて、ウォンドを皿の下に入れ、中のシルクを引っ掛けます。同時に皿を完全に開けます。消えたシルクが皿の下から現れました。

6. 塩の消失と出現 (Salt Pour)

“masquerade part 19 No.2”で“Salt Pour”を扱ったときに、Dr. Jacob Daley のやり方を解説しましたが、基本的にはそれと同じです。ただ、大きく異なるのは、6thフィンガー・チップの場合は、両手を完全に空のように見せることができることです。

[準備]

あらかじめ、6thフィンガー・チップに塩を入れてみます。切り込みの下まで入れたら、これを空の塩の瓶に空けておきます。私は、塩の量が多く見える Levent の瓶を使っています。塩は、普通の食卓塩では粒子が粗いので少し水分を含みやすいので、ポップコーン・ソルトなどにします。

【やり方】

- ①空の6thフィンガー・チップを右手の小指に付けておきます。両手が空であることを見せたら、フィンガー・チップを左手に移して拳に握ります。右手で塩の瓶を取り上げ、これを左手拳の人差指と親指の上に置いて、そのまま瓶を2本の指で持ち、右手で蓋を取ります(写真116)。



写真116

- ②蓋をテーブルに置いて、右手で瓶を取り上げ、中の塩を左手拳に注ぎ入れます。実際はフィンガー・チップの中に入れます。瓶をテーブルに置いたら、右手で余分な塩を振り払うような仕草で右手の中指をフィンガー・チップの中に入れて、ただちに中指を曲げて右手に塩の入ったフィンガー・チップをスティールします。
- ③右手の指をやや内側に曲げたまま、親指と人差指とで上着(もしくはシャツ)の左袖を引っ張り上げます。次いで、左手を開いて塩が消えたことを示します。
- ④空になった左手でテーブル上の塩の瓶を取り上げ、右手は、空中から何か握むような仕草をします。この動作の中で、右手の他の指を使ってフィンガー・チップを固定し、中指をフィンガー・チップから抜きます。抜いたら人差指と薬指とで先端を持ち、親指を使って口が下を向くように回転させ、入口は小指で押さえます(写真117)。



写真117

⑤小指で塩の出る加減を調節しながら、右手拳から塩を流し出して瓶に入れます。塩が流れ出切ったら、一旦、フィンガー・チップを右手にサムバームします。この状態で両手をこすり合わせて残った塩を払い落とします。この動きの中で、空になったフィンガー・チップを左小指に嵌めます。これで、両手は完全に空になりました。

7. シルバー・フィンガー

Scotty York のコイン・マジック「ゴールド・フィンガー」にヒントを得て考えた Scott Alexander の作品です。

【必要なもの】

- ①ダイム(10セント硬貨) 20枚程度
- ②アルミホイル 18cm角 1枚
- ③6thフィンガー・チップ 1個

【準備】

6thフィンガー・チップに準備したダイムをできるだけたくさん詰め込みますが、たぶん20枚くらいでいっぱいになると思います。

【やり方】

- ①ダイムを詰め込んだ6thフィンガー・チップは右手の人差指と中指との間に保持します。
- ②アルミホイルを広げたまま右手に持って、左手と同時にアルミホイル以外に何も持っていないことを示します。次いで、アルミホイルの下で右手の指を曲げ、フィンガー・チップだけが突き出した形にして、これをアルミホイルで包んで型取りするような形で、左指先で押さえて行きます(写真118)。結果として、アルミホイルで右手人差指の「型」ができたことになります。



写真118

- ③左手で、アルミホイルと中のフィンガー・チップとをあたかも右人差指から抜き出したようにして示します。「指の型ができました」と言います。

- ④左手に持っているアルミホイルの「型」を左右に振ります。中でダイムが揺れて発する音が聞こえます。「何か聞こえますよ」と言いながら、客に両手をカップのように組み合わせて出してもらいます。マジシャンは、客の手の上でアルミホイル(とフィンガー・チップ)を傾けて、中からダイムを客の手に流し落とします。
- ⑤ダイムがすべて出たら、右手の小指をフィンガー・チップに挿入してスティールします。アルミホイルの型はそのままの形状で左掌の上に載せて置きます。客に、ダイムをこの指の型のそばに置くように頼みます。この間に、右小指のフィンガー・チップを上着の右ポケットにしまします。
- ⑥客に右人差し指を立てて出してもらい、そこにアルミホイルを被せます。「これはあなたへのお土産です」と言って、残ったダイムはマジシャンのポケットにしまします。

8. ライジング・カード

この手品で使うフィンガー・チップは、厳密には、6thフィンガー・チップである必要はなく、普通の小さなフィンガー・チップでかまいません。あくまでも指があるように見えればいいのです。

ライジング・カードにフィンガー・チップを使うアイデアは、クレイトン・ローソンのものです。クレイトン・ローソンと聞いて、あれ?と思われる方がいらっしゃるかもしれません。「帽子から飛び出した死」のミステリー作家のクレイトン・ローソンです。

現象はライジング・カードですから単純で、客の選んだ(引いて覚えた)カードがマジシャンの持っているデッキから上がって来るものです。マジシャンは右手でデッキを持っていて、そのデッキから客のカードだけが上がって来ます。そのとき、マジシャンのすべての指は見えています。この表現でおわかりだと思いますが、見えている指先のうち、ひとつがフィンガー・チップの先で、マジシャンの本物の人差し指はフリーになっていて、その指でデッキのトップにコントロールした客のカードをライジングさせるのです。

具体的に解説します。

[必要なもの]

フィンガー・チップに半円型の細い輪のようなものを付けます(写真119)。



写真119

材質は真鍮で、原案では2本になっていますが、1本で十分です。操作性の面からも1本が良いと思います。作り方は単純で、半円型の金属(材質は問いませんがやや硬めのもの)をフィンガー・チップに差し込んで、内側を接着剤などで留めます。このフィンガー・チップは右手の人差指に嵌めて使います。嵌めたところを写真120に示しますので、半円型の金属の位置などの参考にしてください。金属の輪は中指にかかることになります。金属が観客に見える可能性はないですが、心配な方は肌色に塗っておいたほうが良いです。



写真120

[やり方]

- ①フィンガー・チップは、右手の人差指に嵌めたままで、デッキを両手の間に捻げて、客に任意の一枚を選んでもらいます。客が覚えたら、カードを元通りにデッキに返し、トップにコントロールします。
- ②デッキをボトムが客の方を向くようにして、右手の指先に縦に持ちます(写真121)。観客からは5本の指の先がすべて見えています。



写真121

- ③このままの状態から、右人差指は自由に動かさずから、右人差指の先をフィンガー・チップから抜きます(写真122)。写真122は、背後から見た写真です。



写真122

④カードを選んだ客にカードの名前を聞いてから、右人差指を使ってトップ・カードをよへ押し上げます(写真123)。観客からは、自分の選んだカードだけが上にせりあがって来たように見えます(写真124)。



写真123



写真124

8. 悪魔の指

これは、一種の小道具で手品そのものではありません。蠟燭やライターの火に指の先から「粉」を吹きかけると一瞬でかなりの炎が出ます。ちょっとびっくりします。指(フィンガー・チップ)の先から出る「粉」が、空気と混じりあって、燃えやすい状態になって炎になるものです。この種のもは通常はアルコールとかライター・オイルとか揮発油とか、場合によっては少量の火薬を使うものが多く、扱うのがやっかいであるばかりでなく、かなり大きな炎が出ますので、手品の場では危険視されます。しかしながら、危険物は一切使用しておらず、「粉」はリコボディウムという物質で、日本では、園芸店で売っている石松子(せきしょうし)と呼ばれる花粉の増量剤です(写真125)。



写真125

この「粉」をフィンガー・チップに開けた穴から蠟燭やライターの炎に吹きかけます(写真126)。



写真126

【必要なもの】(写真127)

- ①フィンガー・チップ 1個
- ②ボールペンなどの先 1個
- ③透明なチューブ(10cm程度) 1本
- ④ゴム球 1個



写真127

ひとつひとつに説明が必要だと思えます。

(1)フィンガー・チップ

まず、フィンガー・チップですが、6inフィンガー・チップのように指の間に挟むようにできているものである必要はありません。通常の指に被せるフィンガー・チップか長めのサム・チップでもかまいません。指の腹側の先端に、鉈とデザイン・ナイフなどで穴を開けます(写真128)。



写真128

(2) ボールペンなどの先(写真129の先端)

シャープ・ペンシルの先でもかまいません。チューブに繋いで、これが先端になりますから、言い換えると一瞬ですが炎に触れるので、できれば耐熱性というか金属製のものがよいと思えます。写真129のものは、ボールペンから外した先とチューブを繋いだものです。大きさはあまり拘泥する必要はありません。チューブの太さと合わない場合もあるかと思いますが、いずれにせよ、グルーガンなどの接着剤で埋めることができますので、大きさよりも材質で選びます。リコポディウムの粒子は細かいので、ボールペンの先であれば十分に通過します。もちろん、それより太いものでもかまいませんが、あまり細いシャープ・ペンシルだと、穴が小さいので、リコポディウムの粒子が通過するかどうか、加工する前に試しておいたほうがよいと思われる。



写真129

(3) 透明なチューブ(写真129)

別に透明である必要はありません。市場で入手しやすいものは透明なものが多いのでそうしました。熱帯魚などの水槽のエアタンクに付いているもので十分ですが、シャンプーやアルコールなどを入れた容器に中の液体を吸い上げて出すためのチューブが付いていますから、それを切って使ってもいいと思います。ちなみに、私は、やや固い黒いチューブも使っています。

(4) ゴム球

材質と大きさ(容量)と機構(メカニズム)が大事です。そうはいつでも、もともと手品用に売られているものなどありませんから、一般の市場で調達しなければなりません。したがって、分野を特定して探す必要があります。ひとつはピペットなどの上に付いている科学実験用のゴム球です。次に、血圧計や身体の一部(耳など)の洗浄などに使う医療用のゴム球です。さらに光学器械用のクリーナーゴム球があります。これ以外に工業用や自動車用のゴム球もありますが、大き過ぎるか小さ過ぎるか、弾力がないかのいずれかですので、この際、科学実験用か、医療用で探します。言わずもがなですが、医療用のほうが割高です。

ゴム球の中は中空で、この中にリコポディウムの粉を入れますから一定の厚さが必要です。また、外から押して(圧縮して)リコポディウムの粉をチューブの先に押し出しますから、ポンプの役目を果たすように弾力がなくてはなりません。圧縮したあと、容易に元に戻るような復元性も必要です。

また、ゴム球の先端にはチューブを装着します。チューブを接着してしまうと、「粉」の入れ替えができなくなりますから、ゴム球の穴を小さ目にして、そこにチューブをきつく挿入するようにします。できれば蓋のできるような構造が最適です。血圧計のゴム球を使う場合は、排気と吸気で中に弁構造のある場合がありますから注意を要します。大きさ(容量)はあまり大きなものだと手に隠れませんが、30ml程度が適当です。大きくても40mlが限度です(写真130)。

それぞれ帯に短し帯に長し、ですが、写真130の左側のゴム球は42mlで大きさも弾力もいいのですが、チューブの挿入のための加工が難しいです。中央のゴム球は、レンズ・クリーナーで、

弾力も加工のしやすさも問題ないですが、大き過ぎます。右側のゴム球は医療用で、用途はスポイトです。そのためチューブ様の管が付いていて、このままでも使えますが、この管は固くて曲がらないので、手に合わせたいと思う方はチューブへの交換が必要です。大きさも30mlで手に隠れる大きさです。私は、この右側の医療用ゴム球を使いました。



写真130

[悪魔の指の造り方]

- ①チューブの一方の端にボールペンの先端を装着し、グルーガンなどでしっかり接着します。これをさらにフィンガーチップの穴に、内側から入れて、ボールペンの先端だけが外に覗くようにしてグルーガンなどで接着します。フィンガーチップの内側からもグルーガンで固定するといと思います。
- ②次に、チューブの反対側の端を、ゴム球に挿入しなければなりません。ゴム球には、消耗品であるリコボディウムを入れますので、粉を入れる穴が必要です。ゴム球は弾力性がありますので、やや小さ目の穴を開けて、そこにチューブを挿入して固定します。あるいは蓋を作ってチューブと接着しておくことも選択肢です。ゴム球には小さな漏斗でリコボディウムを入れます。
- ③以上をすべて装着したものが「悪魔の指」です(写真131)。



写真131

- ④フィンガー・チップは、右手人差指に装着し、ゴム球は右掌に軽く握ります(写真132)。この形で、右親指と他の指を使ってゴム球を潰すと、リコボディウムの粉が、チューブを通して、ボールペンの先から外へ噴き出されます。

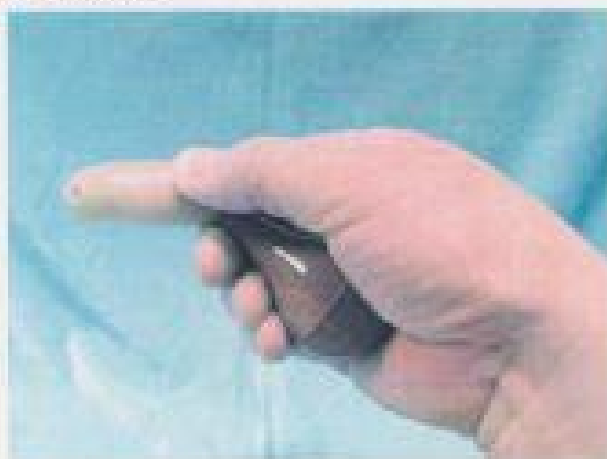


写真132

- ⑤完成したら、ゴム球の中にリコボディウムを入れて、実験をしてみます。一度もやったことがないでしょうから、炎の危険から避けるために、できるだけ屋外でかつ風の来ない場所を選び、不燃性の金属製の椅子や机などの上に、懐燭かライターを立てておき、その炎めがけて、指に装着したフィンガー・チップからリコボディウムの粉を噴き出します。かなりの噴射炎になりますが、一瞬です(写真133。炎の光が強いのでピントが合っていないんですがイメージはわかると思います)。



写真133

[手品への応用]

課題が2つあります。ひとつは、火がないとリコボディウムはただの粉であること。もうひとつは、いくらフィンガー・チップとはいえ、この「キット」を演技の途中で右手に装着するのは容易でないこと、です。

以上のことから、「キット」はすでに右手に装着していて、たとえば、左手に持っている懐燭やライターの炎に吹きかけることくらいしかできません。それだとそれで終わり、観客はびっくりはし

ますが、「いまのは何だったんだ？」という反応だけです。

そこで、蠟燭を最初にテーブルの上に立てておいて、この炎を使って何か手品をひとつ行ない、そのあとで、右手に「キット」を装着して、さらに炎の中から左手で何か出すのはどうでしょうか？

これをクローズ・アップで行なうと、かなりびっくりしますので、なかなかいい手品になります。フル・ルーティンを書いている紙数はありませんので、簡潔に書きます。

[手順の基本骨格]

- ①蠟燭を使ってヒンズー・ヤーンを行なう。
- ②この蠟燭の火に対して「悪魔の指」を使う。
- ③「悪魔の指」の炎の中から客のカード(あるいは指輪)などを出す。

[準備]

- ①デッキとヒンズー・ヤーン用の糸巻きは上着の左ポケットです。
- ②「悪魔の指」の「キット」は上着の右ポケットにあとで装着しやすいように工夫して設置します。
- ③蠟燭とマッチ(もしくはライター)は上着の左内ポケットです。
- ④サインペン(あるいはサインペン)は上着の右内ポケットです。

[やり方]

- ①何気なく両手が空であること示してから、上着の左ポケットからデッキを取り出して観客の一人に1枚抜き出して覽え、さらにサインペンでサインしてもらいます。これをデッキに戻してから見つけようとしてますが何回やっても見つからない感じで、実際は左手にパームします。
- ②カードのことはあきらめて別の手品をやりましょう、と言って、デッキをテーブル上に置き、左手にパームした客のカードを上着の左ポケットに置いて来て、ヒンズー・ヤーンの糸巻きを取り出して来ます。
- ③上着の内ポケットから蠟燭を出してテーブル上に立てて設置し、火を点けます。これで、ヒンズー・ヤーンを行ないます。蠟燭を使ったヒンズー・ヤーンはユージン・バーガーのやり方を参照してください。演技の終わったヒンズー・ヤーンの糸くずを上着の右ポケットにしまいながら、右手に「悪魔の指」を装着します。同時に、左手はヒンズー・ヤーンの糸巻きを上着の左ポケットに入れて、その手で客のサインしたカードをパームして来ます。
- ④「悪魔の指」を蠟燭の火に吹き付けて、炎を出します。この炎の先に左手を出して、左手にパームしている客のカードを出して、客にサインを確認させます。客は炎が出て来ただけで相違ひびっくりしていますから、さらに、その中から自分のサインしたカードが出現するので、手品としては、なかなか寂手で魅力的です。

これは、masquerade part9 の No.4 です。

連絡のメールアドレスは、masqpart4@aol.com です。

2022年4月